

<今日の説教のポイント コリントの信徒への手紙Ⅰ 7章17～24節>

「聖書全体」と「時代の違い」を考えて読むべき箇所。本当の自由とは？

①パウロが問題としていること 神の前で身分の差は意味無し！

「召されたときに奴隷であった人も、そのことを気にしてはいけません。自由の身になることができるとしても、むしろそのままのままでいなさい」(21)。これを読んで自分勝手に思い巡らしてはなりません。パウロがここで言いたいことは何かをまず考えることが大事です。「神様の前では、それは気にすることない」とパウロは言っているのです。「そこではもはや、ユダヤ人とギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男と女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです」(ガラテヤ 3:26-29)。パウロの常套語です！

②すべて過ぎ去る中で、何に仕えるかを間違ってはならない！

もう一つ、パウロが考えていることがあります。「召されたときの身分のままで」(17,23)の、「身分」は原文にはありません。「この世はもうすぐ過ぎ去るということを忘れてはならない」と考えているのです(そのことは25節以下を読むとよく分る)。今のこの人生が全てだと思つと、この世的成功だけを目指すようになりやすく、それがうまく行かないときには焦り、果ては絶望に陥ります。それは神様が本来私たちに用意して下さった人生ではありません。神様に立ち帰る(方向転換する:回心)ことが大事であり、そうするなら、必ずまた、神様と生きる新しい人生が始まり出すのです！

③ルターの『キリスト者の自由』の冒頭から 真の自由人とは。

本当の自由人とはどのようなものか？ そのことを、ルターが書いた『キリスト者の自由』から味わいたいと思います(別紙参照)。

④それにしても、奴隷を認めるのはおかしい？ 教会の使命！

この箇所を読む時には、奴隷の状況が今とは違うことを知っておく必要があります。また、罪深い人間が作っているこの世界においては、性急な行動が悲劇を生んで来たことも歴史の事実です。教会が神の下にある共生の姿を示していく。それが聖書が示している、私たち信仰者に託された第一の使命ではないでしょうか！

(BBCドラマ『ダウントンアビー』を見て考えさせられたこと)